

神野で発見された「十三仏板碑」について

藤 由美

昨秋の「ふるさとの歴史展」では、板碑の特別展示をしましたが、この展示がきっかけになって、神野の三橋家所蔵の板碑が新たに見つかりました。

碑面に十三仏の種字を彫り込んだ「十三仏板碑」で、残念ながら断碑ですが、八千代市内では初めての貴重な板碑です。

〔発見の経緯〕

最初に拝見したのは、2021年11月27日、佐倉市での遠山成一先生の講演会場の駐車場でした。

ご一緒した畠山さんのお話では、ふるさとの歴史展で熱心に見学されていた三橋様から「わが家にも文字が読み取れない棟札などがある」とのことで、翌週の講演聴講の際、畠山さんにお見せしようと持参されたとのこと。同行した青田さんと私も、お目にかかることができました。

写真を撮って、帰宅後調べたところ、十三仏板碑とわかり、あらためて本年3月16日、三橋家を畠山さんと訪問し、拓本を採らせていただきました。

〔三橋家所蔵の十三板碑の概要〕

縦33cm・横28cm・厚さ4cm、緑泥片岩製の武蔵型板碑（断碑）です。

上・下・右部を欠き、種字が上段には2字、下段には3字（右端は右半分を欠く）が並んでいます。



各種字は、線彫りの円形月輪内に薬研彫りされ、その下には蓮座が薬研彫りされています。

上部には主尊種字の蓮座一部と、左端上に月輪の一部が、下部にも月輪の一部が残っています。

種字は、上段左からキリーク（阿弥陀如来）・バン（大日如来）、下段はサク（勢至菩薩）・サ（観音菩薩）・バイ（薬師如来）の5字が判明できます。

紀年銘などの銘文はありません。

〔十三仏板碑とは〕

人は死後、冥途で閻魔王などの十王の裁きを受けるといふ十王思想が中国から伝わり、日本でも平安末期からその本地仏と共に信仰され、初七日から四十九日の7回と百ヶ日忌・一周忌・三回忌の計十回の追善や逆修の法要が行われるようになりました。

中世にはさらに七・十三・三十三回忌の本地仏が加えられて「十三仏」信仰が成立します。

石造物でも十三仏の仏像やその種字が表現された「十三仏板碑」が造立されました。その初現は永和4年（1376）銘の印西市吉高の羽黒十三仏堂の下総型板碑で、室町時代末まで広く普及しました。

〔三橋家十三仏板碑の復元案〕

この板碑は、本来どのような板碑だったのでしょうか。その類型を探し、十三仏の種字の配列を復元してみました。

参考になったのは、3列4段構成の船橋市八木ヶ谷長福寺の文亀4年（1504）銘の断碑と、関宿町元町吉祥寺の享禄3年（1530）の記録です。

三橋家板碑が主尊の直下にバンを置いている点に注目すると、5つの種字の配列が一致している后者の関宿の例が復元案の参考になりました。

さらに、主尊タラクの右と左のやや上に日輪・月輪が施され、元の大きさは横が約32cm、縦は90cm以上あったと思われます。

造立時期は、十三仏の配列や蓮座の形状から天文年間（1532～55）と推定されます。

下記の図がその復元案で、○が残存部分です。

